

〈研究ノート〉

ジャバ・チベット族の習慣法 (一)

——婚姻家族と家庭経済——

松岡 正子

本稿は、2019年8月に中国四川省甘孜藏族自治州雅江県瓦多郷において実施したジャバ（扎巴）・チベット族に関する実地調査の整理とその初歩的分析である。

ジャバ・チベット族は、現在も「走婚」（妻訪い婚）を行い、母系制社会を維持する集団である。中国の母系制社会は雲南省のモソ人のそれが最も知られているが、他地域の母系制についてはあまり報告されていない。ジャバ・チベット族についても例外ではなく、2003年によく四川省民族研究所を中心に本格的な調査が始まり、馮敏 [2010] によってその結果がまとめられた。ただし馮の調査はジャバ地区北部の上扎巴に集中し、南部の下扎巴については十分ではない。実は、ジャバ・チベット族は歴史的に道孚県側の上扎巴と雅江県側の下扎巴に分けられ、母系制や走婚についても両者に違いが指摘されている [馮2010: 191]。

そこで小稿では、まず、下扎巴の雅江県瓦多郷から調査を開始し、そこで得た第一次資料と馮敏 [2010] の資料をもとに、下扎巴の婚姻と家族、村の運営と宗教活動に関する習慣法を整理し、それらを上扎巴と比較して、変化の諸相と背景について考える。

なお、今回は四川大学の李錦教授との合同調査で、甘孜藏族自治州の雅江県瓦多郷と道孚県亜卓郷の村でフィールドワークを行う予定であったが、大雨のために道孚県に入ることができず瓦多郷のみの調査となった。

一. 先行研究

四川省西部には、149万6524人のチベット族が居住し、チベット族総人口の約23.8%を占める（2010年）。四川チベット族は13の下位グループに

分けられ、総人口の約90%を占めるアムド（安多）とカム（康）のほか、ギャロン（嘉絨）、白馬、グイリヤン（貴琼）、アルス（爾蘇）、ジャバ（扎巴）、ミニヤック（木雅）、ナムイ（納木依）、シヒン（史興）、チュユ（却域）、プミ（普米など）の諸集団が、四川省の甘孜藏族自治州や阿壩藏族自治州、涼山彝族自治州木里藏族自治州に集住する⁽¹⁾。

このうちジャバ・チベット族は、総人口9411人で（2001年）、鮮水河流域の海拔3000m前後の高山峡谷地帯に分布し、歴史的に上流部の上扎巴と下流部の下扎巴に分けられる。現在の行政区分では、上扎巴は道孚県扎巴区の紅頂、仲尼、扎拖、扎拖の4郷を含み、下扎巴は道孚県扎巴区の下拖と雅江県扎麦区の瓦多、木絨の3郷を含む（図1）。

ジャバ・チベット族に関する報告や論文はあまり多くない。居住地が極めて閉鎖的な高山峡谷地帯にあったために外部にあまり知られておらず、フィールドワークも容易ではなかったことや、ジャバが四川チベット族諸集団の一支として研究されたのが近年の1980年代以降であることなどによると思われる。

2008年までの研究状況については、葉静珠穆 [2009:47-52] に詳しい。これによれば、ジャバ研究の主な課題は族源、扎巴語、婚姻形態と親族制度の3つで、族源には西夏遺民説と笄人説、東女国説がある。查壩（扎巴）についての初出は、民国期の趙留芳『查壩調査記』や羊磊『道孚小志』で、簡潔な記述である。任新建は1960年代に彼らの母系制に注目し、東女国遺民説を『雪域黄金』（2003）で展開した。1980年代からは西南民族学会を中心に六江流域のフィールドワークが行われ、孫宏開らはジャバ語を六江流域のチベット族諸集団の言語の一つとして研究を進めた⁽²⁾。

2000年代以降は、2003年に四川省民族研究所が四川道孚県扎巴母系制婚姻家庭研究課題組を設け、本格的なフィールドワークを始めた。これに参加した馮敏は「川西扎巴藏人親属制度初探」（2005）や「川西蔵区の扎巴母系制走訪婚」（2006）を発表し、『扎巴藏族—21世紀人類学母系制社会田野調査』（民族出版社2010年）を上梓した⁽³⁾。

(1) 松岡 [2017: 253-254]。

(2) 葉静珠穆 [2009: 47, 52]。

(3) 書評として李佐人 (2011) 「扎巴研究的開拓与突破—評馮敏『扎巴藏族—21世紀人類学母

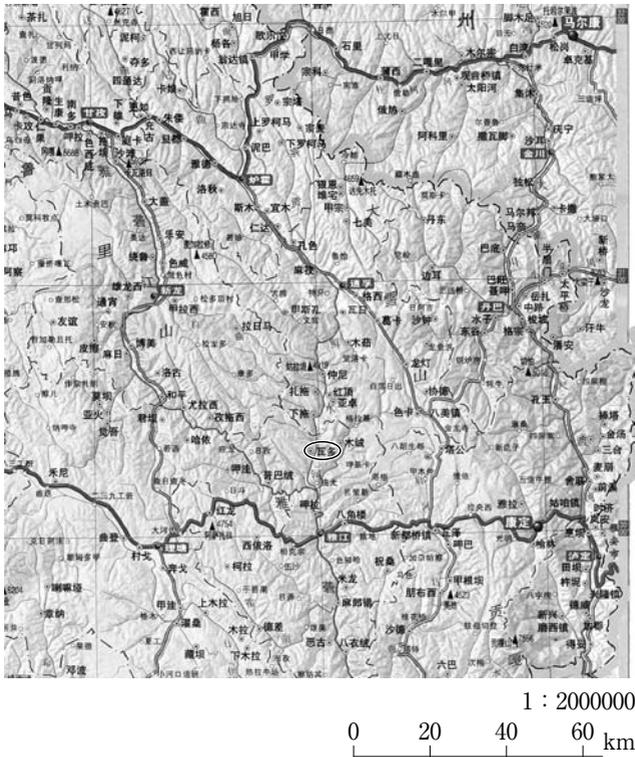


図1 扎巴地区

[凡例]：(瓦多)は調査地

[出所]：四川省絵局編制『四川省地図集』成都地図出版社
2001 376-377頁

馮敏『扎巴藏族』は、数か月単位のフィールドワークを重ねて得た資料や文献史料を基に、12の章と調査日誌から構成された民族志である。内容は生産活動や経済、政治、婚姻、家族、宗教信仰、習俗、科学技術、芸術娯楽など生活の全般にわたる。調査方法は、郷の概要については現地の幹部に集中して聞き取りを行い、婚姻や家族などに関しては複数の個別インタビューを実施している。第一次資料としての価値が高く、ジャバ研究

系制社会田野調査』(四川民族学院学报第20卷第2期105-108)がある。

の基本文献として重要である。

ただし、次のような問題も指摘できる。第一は、主な調査対象が上扎巴であり、下扎巴の調査が少ない。馮自身もそれに言及しているが、上扎巴と下扎巴の違いは走婚や母系制の変化を検討するうえで重要であり、下扎巴調査は今後の課題である。第二は、上扎巴の4郷25村の約4600人および下扎巴の3郷19村の約4600人を「扎巴藏族は」として一律に論じている点である。本書は扎巴藏族の民族誌ではあるが、一律に論じることは不可能である。4郷25村にはそれぞれ自然条件や生活方式の違いがあり、特に山頂の牧畜区と山腹の半牧半農区のような垂直分布による生活の違い、清代、民国期の土司政度下の土百戸の違いによる歴史的差異など、ジャバ集団内の地域性に基づく報告の記述が必要である。本文中にもしばしば「ある所(村)では」という言葉があり、筆者も統一的な書き方に困難を感じていたと思われる。民族誌の意味や作成については別に論じなければならないテーマであるが、少なくとも、全体を俯瞰したうえで典型的な村落を幾つか抽出し、それらの村落に関する広範な項目の調査結果に基づいて「扎巴藏族は」という総括をすべきかと思われる。

第三は、本書では、上下の扎巴の家族・社会の違いについて前者を母系制、後者を父系制の初期段階としている。これは父系制を母系制からの進化とすることを前提としているが、果たしてそうなのだろうか。また本書で用いる走婚、婚姻、母系制と父系制、対偶婚などの定義が明確ではない。例えば、「走婚」を婚姻の一形態としているが、一般には、走婚は男女関係を表す「走訪制婚姻」であり、その過程で子供ができて社会的な親子関係が公開され、安定した男女の一組となる「走訪を経た婚姻」といえる。

このほかジャバ研究に関する主な論文には、①劉波(2005)「扎壩大峽谷「走婚」民俗の人類学思考」や②林俊華(2006)「扎壩「走婚部落」的歴史文化」、③袁旭川(2011)「扎巴藏族走婚制度、家戸分工及社会性別」と④「鮮水河谷扎巴藏族走婚制度研究」、⑤徐銘(2012)「扎巴藏族母系制走婚習俗研究—『扎巴藏族—21世紀人類学母系制社会田野調査』関与婚姻の解読」、⑥熊靈娜(2017)「扎壩走婚形式的變化及其原因分析」、⑦趙心愚(2018)「中国西南扎巴人、摩梭人「走婚」的範圍与界限—兼論其对母系家庭形態存続的影響」等がある。

これらの論文において注目すべき点は以下のようである。①劉波[2005]は、走婚の変化について計画政生育政策の及ぼした影響に最初に言及したものである。走婚で子供ができれば必ず「結婚証明」をとらなければ経済上の重い罰金を課せられる、そのため女性は次々と登記を行って父親を明確にしたが、同居はしておらず、従来の通い婚の形式をとっているとする。

また袁は⑤で、家内の仕事、すなわち生産や家事育児などは女性が主に担い、財産の使用権も継承権も夫婦は平等であるが、家外の宗教や政治などの公共領域では男性が主導する、特に、近年の経済発展のもとで男性が外部で収入を得る機会が増えており、男性の地位は重要性を増しているとする。これは、馮が主張する母系制から父系制への変化の要因が男女の分業制にあり、ジャバの母系制自体に内在されていることを指摘したものと見える。さらに⑥では、現在もお走婚を継続するのは、地理的環境や経済条件という要因のほか、根底に「血親不分離」（血縁者はともにくらす）と「禁止血親走婚」（血縁関係者間で走婚をしてはならない）という観念が根強くあるからだとする。筆者は「血親不分離」についてはさらに検討が必要であると考え、袁のこれら2つの指摘は走婚の変化を考えるうえで重要である。

小稿では、以上の先行研究で提起された課題をふまえて、下扎巴瓦多郷における走婚、婚姻家族の状況を整理し、馮報告の上扎巴のそれと比較して、「走婚」や家族形態の変化の状況や背景、また、下扎巴の家族形態を「初期的父系制」とする馮の論について初歩的な考察を行う。

なお、本稿で用いる母系制や母権の定義は、次のようである[牛島1987]。母権制は、①地位や財産が母を通じて受け継がれる母系制、②妻方居住婚、③男性に対する女性の優越的地位という社会現象を総括した言葉である。母系制社会では、政治、経済、宗教などの遂行は男性が握るのが通常であり、母を通じての権利と義務の継承とは、母の兄弟から姉妹の息子に継承されることを意味する。換言すれば、母系制社会では、女子の社会経済的地位は高いが、女人政治を意味するものではない。これに対して家父長制では、系譜が父から息子へと父系的にたどられ、財産も父から息子に継承され、権威は夫=父=家長に集中し、すべてを夫が支配し妻が従属する。

二. 瓦多ジャバの家族と婚姻に関する習慣法

(1) 瓦多郷杜米村の概要と村民の家庭経済

瓦多郷は、総戸数426戸、総人口1811人(2007)で、学優、白龍、交吾、徳米、吾知、中古の6つの行政村からなる。村落はみな海拔3000メートル前後の高山地帯にあり、家屋も山腹から頂上にかけて分散している。交通は不便で、綴れ織りの山道は大雨による崖崩れでしばしば通行不能になる。郷はジャバ地区では雅江県城に最も近く、郷政府所在地の学優村(海拔2680m)は県城から46kmに位置する。近年、2020年のダム完成をめざして交通路の整備やトンネルの建設が急ピッチで進められており、隧道が開通すれば、県城まで車で約2時間に短縮される。郷村の政府幹部は、ジャバ文化を資源とする観光開発を将来の経済発展の柱にしようとしている。

調査地の徳米村は、学優村から南へ数キロの幹線沿いに位置し、ダム建設に伴う移転や道路建設等によって村の景観にも大きな変化がうまれている。筆者は、2019年8月28、29日に郷幹部の案内で村落を参観し、AZ(男性52歳)家やLZ(男性76歳)家で聞き取りを行い、さらにAZYA(村書記、男性50歳)、YD(村民代表、76歳)、AJ(旧村会計、76歳)に村落の概要や個別の家庭状況を聞いた。以下はその記録をまとめたものである。

徳米村は、総戸数126戸、総人口526人で(2018年)、うち45戸がダム建設で水没することになって土地や家屋を国家に没収され、2016年、幹線沿いや山腹に新しい家屋を建てて移転した。村はダム建設のために全容は大きく変わったが、県城などに移住する者はなかった。また村内の山腹にはなお伝統的な碓房が残り、古い道具類が保存されている。耕地は総面積が550畝であったが、300畝あまりがダム水没のために没収され、現在は残った畑約200畝で自給的農業が行われている。しかし、2017年から1畝あたり2040元が毎年補償されており、これはずっと継続されるという。また水没する45戸に対して一人あたり6万円の賠償金がだされた。本村では、賠償金を全村民に均等に分配することにして村民間の不平等を解消したが、別の村では賠償金を水没する家庭だけが受け取ったために、村民同士の対立が表面化したという。本村では村民間の紐帯が強いことがうかがわれる。なお、かつても現在も村民の主な経済収入は松茸や虫草の採集で

ある。以前は牦牛が飼われていたが、今はダム建設による水没で畑の半分以上がなくなり、飼料用の草類が足りなくなって多くが売られてしまった。現在は、戸別に平均5～6頭の乳牛が自家用に飼われている。

以下は、ダム建設を境に生活の変化に直面する2つの家庭の家庭経済の事例である。

学優村のCB家は、9人家族、4世代同居である。GB（53歳・村長）は長男で当主となり、妻（52歳）と3人の息子および長男の妻と孫、両親、ラマとなった弟（36歳）がいる。耕地16畝、うちチンクー麦2～3畝、小麦2～3畝、トウモロコシ2畝、ジャガイモ10畝、家畜は牦牛8頭、乳牛1頭で自家用の酥油と牛乳をとる。牛の放牧は老人が行う。一人当たり年間、虫草で1万元あまり、松茸で7～8千円の収入がある。また息子がトラックでセメントを運び3000～4000年の年収がある。

徳米村のYA家は、6人家族、3世代同居である。YA（50歳・書記）が一人娘であった妻の家に婿入りして当主となり、妻の両親とともに暮らす。息子2人と娘がおり、娘は本村に嫁いだ。2016年にダム建設のために家屋と土地をすべて没収され、幹線沿いに移転して3階建て290m²の家屋を建てた。1階は一部を雑貨店として営業を始め、大部分を年1万元で食堂経営者に貸し出した。2階は民宿にする予定で、さらに道の反対側にもう1棟を民宿用に建設中である。三階は家族の居住部分である。もともと耕地11.46畝を所有していたがすべて没収され、すでに農作業をしていない。2017年から1畝あたり2040元、毎年23378.4元の補償がある。以前は7～8頭の牦牛を飼っていたが、餌草の土地も没収されたために飼うのをやめた。主な経済収入源は、一家で松茸を採集して3～4万元／年、虫草3～4万元／年ある。

以上の2例は、ともに戸主夫妻が家庭経済を管理し、決定権をもつ。ただし、CB家の家庭経済が従来の典型的な事例であるのに対して、YA家はダム建設によってすでに農業を行わなくなった例である。従来型は、小麦、チンクー麦、ジャガイモを主食糧とし、トウモロコシを飼料として栽培する。牦牛や乳牛、豚を飼って自給し、「臭猪肉」を作る。臭猪肉は伝

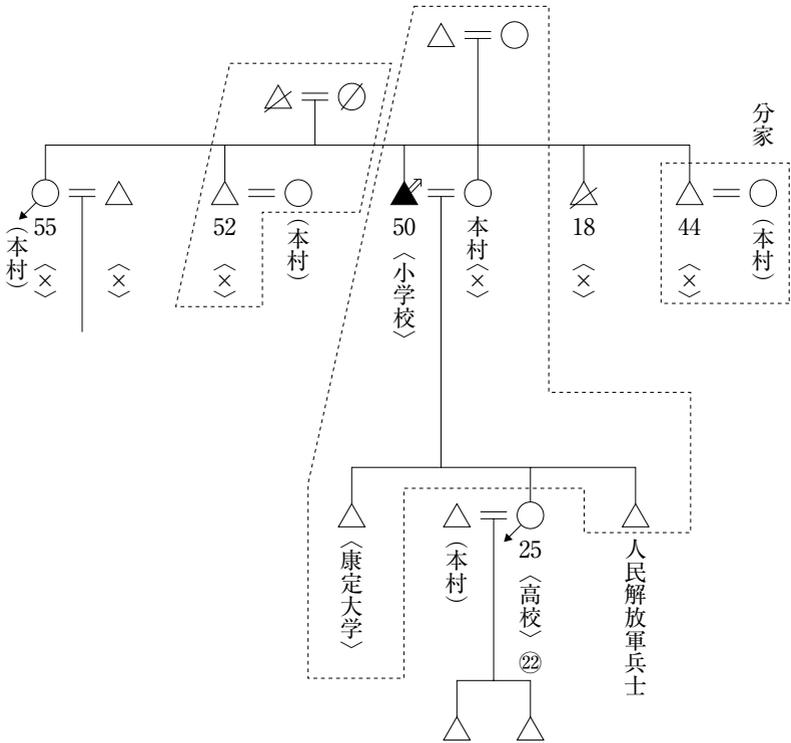
統の保存食であり、葬儀には必ず用意された⁽⁴⁾。主な現金収入源は、松茸などの菌類や虫草等の採集と販売である。近年もその形態に大きな変化はないが、漢方薬材や菌類の価格上昇により、各戸の収入は向上している。さらにダム建設にともなう補償や道路建設のために沿線の村々には雅江县城に近い下扎巴側から順に様々な経済効果がみられる。特にダムで水没する下扎巴の村々には補償費が毎年支払われ、最も雅江县城に近い瓦多郷徳米村では、建設や運輸に関わる人々のための飲食店や旅館が建設され、原材を運ぶ運輸業に携わる者も出ている。村長や村書記は、出稼ぎで成功し、情報を最もよくつかむ者であり、その動きは状況の変化に最もよく反応したものだといえる。

(二) 下扎巴における婚姻家族の事例

以下の2つの事例は、下扎巴の典型的な結婚を示すもので、①YAは男性が女性の家に入る妻方居住で、②CZは女性が男性の家に入る夫方居住である。

①YA (男性50歳、徳米村書記) は、姉と4人兄弟の三男である (図2)。両親はすでに他界し、母は同郷の白龍村から嫁いできた。本人のみが小学校卒で、他は全員学校にいったない。姉 (55歳) は20歳で本村に嫁ぎ、兄 (52歳) は、15歳で本村の娘と婚約し、結婚後は両親と同居して房名を継いだ (房名は尼瑪阿森)。婚約は双方の親が決めた。上の弟は18歳で逝去、下の弟 (44歳) も本村出身の女性の家に婿入りした。YAも次男だったので本村の一人娘の家に婿入りし、その房名を継いで当主となり、妻の父 (YD76歳、村民委員会代表) らと同居した。婿入り時には牛1頭と馬1頭、チベット服一式と現金を持って行った。新郎側から新婦側へ贈ったものは新婦の父に酒、母にチベット服一式のみである。息子2人と娘一人がいる。長男は康定で大学の旅行学部に通っており、未婚。長女 (25歳) は高校卒、22歳で結婚。2016年嫁入り時には10数万元の現金を持って行った。高額であるが、親戚の祝金は一人当たり5, 6千~1万元であるため、村内では平均的な額だという。次男は人民解放軍兵士で、辺境地区で国防

(4) 馮 [2010 : 367-368]。



[凡例]

- | | | | | | |
|---|------------|---|--------------|---|---------------------|
| △ | 男性 (数字は年齢) | ○ | 女性 (") | △ | 婚出 |
| ○ | 女性 (") | △ | 出身地、あるいは嫁ぎ先 | △ | 婚入り |
| = | 結婚 | △ | 学歴 (x) は学歴なし | △ | 死亡 |
| □ | 兄弟姉妹関係 | △ | 同居家族 | ○ | 結婚形態 (数字は結婚年齢) (職業) |
| △ | 親子関係 | | | | |

図2 YZ家

[出所] 2019年8月、筆者の現地での聞きとりによる。

の任務についている。

②CZ (男性53歳 学優村村長 小卒) は、妻 (52歳、学支村出身、学歴なし) と3人の息子、父 (76歳、婿入り) と母 (77歳) の7人家族である (図3)。CZは長男で当主となった。5人の妹 (50、47、45、42、39歳) と2人の弟 (36、32歳) がいる。5人の妹はすべて嫁いだ、嫁いだ年齢は順に14、16、17、17、18歳。上の弟はラマ。CBが妻と結婚した1990年に、同時にCBの末の妹が学支村の妻の弟に嫁いだ。妹の嫁入り道具はチベット族の正装3組、現金3000元、チベット靴一組、耳飾り一組。これに対して新郎側は新婦の母に乳牛1頭とチベット正装一揃えを嫁迎え時に贈った。下の弟は婿入りし、婿入り時に馬1頭と乳牛1棟、腕時計とバイクを持って行った。婿入り後、彼が戸主になり、財産を妻と共有した。万一、夫婦が感情があわずに別れることになったら、財産は夫婦が均等にわける。た

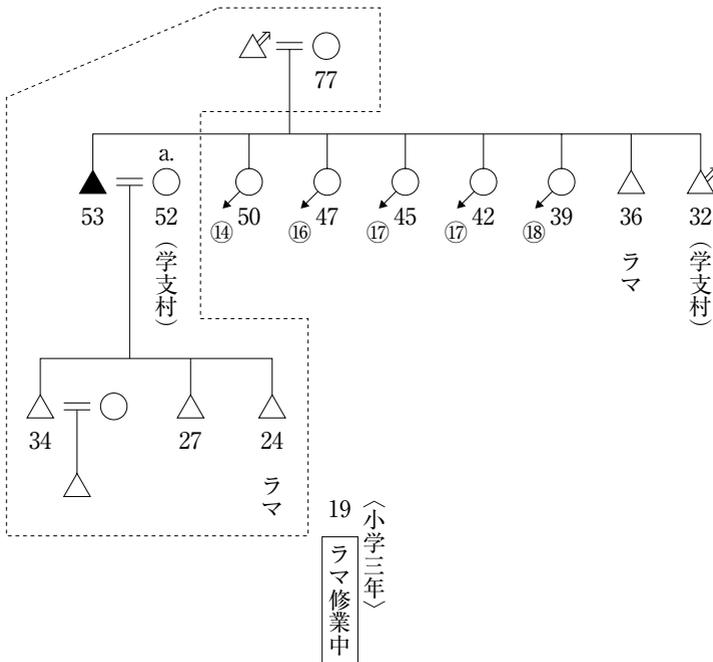


図3 CB家

[凡例] 図2と同じ。

だしどちらかが過ちを犯した場合の離婚では、過ちを犯した方の取り分は少なくなる。CZの3人の息子のうち長男（34歳）は結婚して息子が一人いる。学校には通ったことがない、トラックで道路整備用の砂利などを運搬している。次男（27歳）は未婚、広安職業技術学院卒業後、雅江県皇城の法院で働く。三男（24歳）は少学3年で退学、ラマについてチベット文字を学び、19歳で出家し白玉のラマ学院で修行中である。

これらの事例と現地でのききとりによれば、下扎巴の婚姻家族には以下のような特徴がみられる。

一、長男が両親の家に残って当主になり、房名を継ぐ。兄弟が複数の場合は、次男以下は婿入りし、あるいはラマになる。

原則として一家族では、一世代は一組の夫婦からなる。聞き取りによれば（2019）、徳米村では、家庭構成は10人以上の大家族が7～8戸、6～8人が93戸、3～4人が20戸、2人が5戸で、6～8人規模が最多で全体の約74%を占める。6～8人の家庭とは、一世代に一組の夫婦で3世代あるいは4世代同居という直系家族である。

二、男子がいない家は、原則として長女が婿を迎える。

三、婿入り時には、チベット族の正装一式、馬や牛数頭を持っていく。牛がない場合は羊を代わりとする。婿入り後は妻方の当主となり、財産の所有権や使用権を妻と同等にもつ。徳米村のYAが30年前に婿入りした時は現金900元と正装一式、馬1匹、ヤク1頭、乳牛1頭を持参した。実家の財産の継承分をもっていくという意味をもつ。

四、女性は、原則として他家に嫁ぐ。嫁入り道具はチベット族の正装と飾り物一揃え、現金などである。実家の財産分与の意味をもつ。近年は経済条件が良くなっており、日月星辰の一揃いの飾り物（数万元）をどの新婦も嫁ぎ先に持っていく。また現金を一般に7、8万元、多い場合は10数万元もっていく。結婚の祝金は、親戚は一般に5000～6000元、多い場合は1～2万元、普通の友人でも最低でも200元である。親戚友人から贈られた祝金もすべて新婦に持たせるため、新婦の持参金は総額40～50万元にもなることがある。これらはすべて嫁ぎ先の財産となるが、新婦も新郎と同等の財産権をもつ。ただし、離婚の場合はこれらを実家に持ち帰る。これに対して、当時、新郎側が新婦側に贈ったのは、新婦の父に酒、新婦

の母にバターだけだった。ヒトの移動は財産の移動を意味するといえる。

五、婚姻圏は狭く、村内が主であるが、郷内の他村の場合もある。

六、1980年代まで親が決める結婚が行われ、双方の兄弟姉妹を組みあわせる交換婚もあった。

七、瓦多でも、70歳代以上の世代までは「走婚」が行われていたらしい。彼らの社会では（法律上の）婚姻外の子供すなわち私生児は社会的な蔑視を受けない。走婚の男女間が安定していて、みな（世間）が子供の父を知っている場合は、子供は私生児とはいわない。父親が誰であるかわからない場合のみを私生児という。

八、分家の際には、財産や土地の分配は父母が決める。家族の頭数および実情に基づく。村内ではこれまで一戸のみが分家した。現在は「計画生育」が浸透して子供は2～3人となって人口が減少したため、兄弟の一人が両親の房名を継いで当主となり、他は婿入りしており、分家が必要になることはあまりない。

以上によれば、下扎巴では一世代一組の夫婦が原則で、女性が男性側に入る婚姻と、男性が女性側に入る婚姻が同様に行われているといえる。また、当主は男性が担うが、財産所有の権利は夫婦均等であり、男女とも婚出する場合は財産の均等分与に相当する装飾品や現金を持っていく。

これらは、典型的な母系的家族形態ではないものの、男女が同様に婚出し、同等の財産権をもつことなど母系制の展開ともいえる。母系と父系の境界は曖昧である。

このほか家族の重要な機能の一つに、老人の扶養がある。例えば彼らの社会では、夫が死んだ場合、残された妻（寡婦）が両親を養う。再婚は少ない。寡婦が外部で他の男性と関係を持ったとしても、婿として迎えることはできない。また、夫婦に子供がいない場合は、夫側と妻側の親戚が一堂に会して話し合い、夫側から男子を、妻側から女子を選んで夫婦とし、彼らを夫婦養子とする。次の③AZの事例である。

③AZ（男性52歳 房名は阿白）は、4人の兄弟姉妹の3番目である（図4）。一番上の姉と妹は本村の男性に嫁ぎ、兄が阿白家を継いで両親と暮らした。AZ本人は、信用社に勤めている父の弟に跡継ぎがなく老後をみる者がいなかったため、親戚間で相談して異なる家から娘と息子をだして結

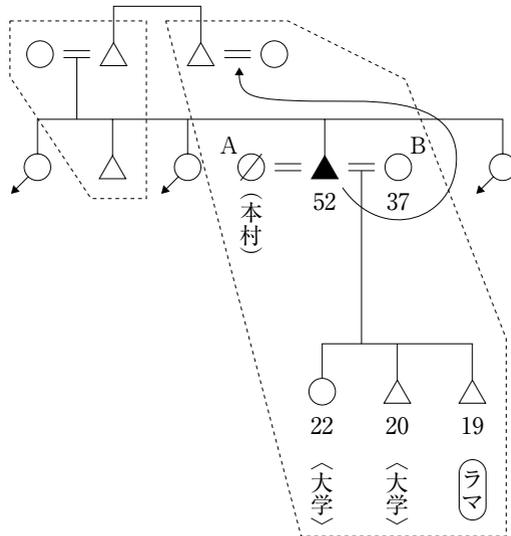


図4 AZ家 阿白（房名）

〔凡例〕 図2と同じ。AとBは姉妹。

婚させることになった。まず小学生の女子が養子となり、7、8年後にAZが養子となって1987年に結婚し、房名阿白を継いだ。結婚時に男性側のAZがもっていったのは、1畝の耕地と5、6頭の牦牛、チベット族の正装一揃えで、当時としては高価なほうである。その後、最初の妻が子供を産まないまま病死したため、両家が再度話し合い、妻の妹が13歳で嫁入りし、16歳で第一子を産んだ。3人の子供がおり、長女（22歳）は双流で大学に通い、長男（20歳）も大学生、次男（19歳）は小学校卒業後、17歳で出家してチベット仏教学院でラマの修行中である。

また、かつては漢族男性の婿入りが少なくなかったという。閉鎖的な地理環境のなかで村内を中心とした外婚制の婚姻を継続していくことには困難もあった。そのため当地にきた漢族は婿として歓迎された。民国期には道孚県の金鉱に多くの漢族の金鉱夫がきており、村々を回る漢族の匠人や小商人も結婚の対象であった。④は、瓦多郷徳米村の漢族を父にもつ漢族男性の例である。下扎巴の婚姻慣習にそって婿入りし、当主になった。

④LZ（76歳漢族）は、父が安岳県出身の漢族、木匠で、本村に働きに

来て婿入りした。両親はともにすでに死亡。JZは長男で当主となり、父に習って木匠になった。2人の弟と妹がいる。上の弟は婿入りし、下の弟は亡くなった。LZには4人の娘がいる。長女（53歳）が郷内の交吾村出身の婿を取り、下の3人は嫁いだ。長女には2人の娘と息子がいて、上の2人の娘は嫁ぎ、下の息子が当主になって娘2人と息子をもうけた。LZは、長女夫婦、孫夫婦と子供の4世代同居である（図5）。

なお、婚姻に関わる儀式は、一般的な嫁取り婚と同じでかなり煩雑である。AZによれば、徳米村の婚儀のプロセスは、婚約、新婦側の宴、新郎側の宴、里帰りを経る。婚約には、舅舅あるいは一族で信望のある者が酒一瓶とハタ一枚を持って申込みに行く。先方がそれを受け取ったら成立を意味し、まず小規模な儀式を行い、1、2年後正式な婚儀を行う。嫁迎えは、新郎側から3人の話上手な者が酒とハタ、新婦の母に正装一揃えを持って

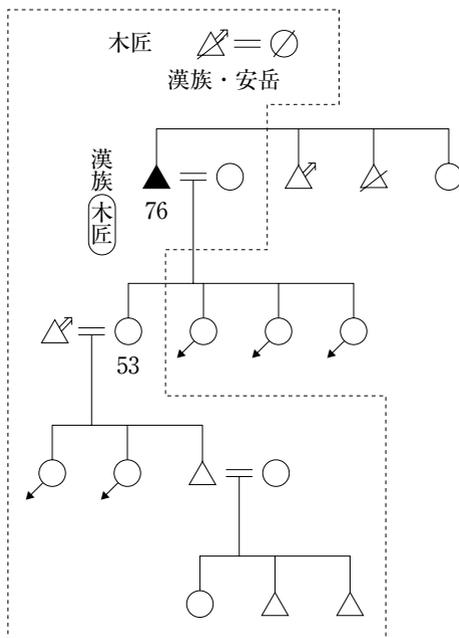


図5 LZ家

[凡例] 図2と同じ

いく。新婦側では親類が前日に集まって宴を開き、新郎側はイロリに最も近い柱「米REI」にハタを奉げる。婚儀は3日間行う。一日目は新婦側、二日目は早朝に新郎側が嫁迎え、途中の道で3回の接待がある、一回目は新郎側が馬に乗ったまま酒を飲み、ハタを奉げる、二回目も同様、三回目は新郎家入口で、新郎側親戚が迎えの言葉をのべる。新婦が馬を降りる場所には雍仲記号を描いた敷物を敷き、座席までの道にはザンバとチンクー麦を撒く、付き添いの2人の男性と2人の女性は向かい合って座り、酥油をたらした牛乳を飲む。新郎側新婦側が互いにハタを贈る。新郎新婦はサンゴを交換し、皆が祝金とハタを贈る。3日目早朝、新婦側親戚が帰宅。里帰りの日を占い、新婦の実家に1週間ほど滞在する。

（三）上扎巴の走婚と婚姻

馮 [2010] によれば、上扎巴の婚姻には、次のような規則（習慣法）がある。一は、同一の房名を持つものは血縁関係にあり、通婚できない。二は、血縁関係や婚姻関係のある親類とは通婚できない。なお養父母、養子間のような疑似的親類はこれに含まれないが、通婚すれば人々の譴責をうける。三は、兄弟姉妹や血縁の男女間で性的な話を話題にしてはならない。夜、男性が家屋の壁をよじ登って女性の下に通う姿を姉妹にみられてはならないし、身重になった姿を舅舅や兄弟にみせてはならない。それは本人たちにとって恥であるとする。走婚は本人どうしが内々で行うことであって、性的関係の自由を意味するものではない。彼らの社会では、家族を含む人前での性的な言葉や行為も厳しく抑制されている [馮2010：138-140]。

また上扎巴の「走婚」について、馮は次のように説明する。走婚はジャバ語では「熱作依茲」といい、熱は女性、作は寝る、依茲は行くの意味で、女性の下へ寝に行くことである。この関係にある男女は「呬依」とよばれ、呬は愛、依は対象で、愛人を意味する。女性は実家で暮らして嫁がず、男性が女性のもとを夜訪れ、明け方に帰る。男性は女性の家族には知られないように通い、関係が安定し、子供ができたなら公にする。生涯に複数の「呬依」をもつが、短期と長期の関係がある [馮2017：145-150]。すなわち馮のいう「走婚」とは、社会的認知を経た、安定した関係をもつ「呬依」

どうしが同居はせず、両者とも実家を生活基盤として、男性が女性の下に通うという「走訪婚」である。また1980年代から実施された「計画生育」によって結婚登記が義務づけられてからは、結婚登記を行い法律上の夫婦になっても同居せず、男性が女性の下に通うという形態も行われている。

では、馮が調査した2007年当時の扎巴の婚姻形態はどうであったのか。馮 [2010 : 145-179] によれば、上扎巴ではなお走婚が行われ母系制が主であるが、下扎巴の下拖郷ではすでに走婚率は低く、嫁取り婚が約半数を占めた。道孚県扎巴区5郷の婚姻状況統計表によれば [馮2010 : 137]、16～75歳の男女既婚者のうち走婚率は上扎巴の仲尼、紅頂、扎拖の各郷では平均65%であるが、亜卓は51%にさがり、下扎巴の下拖は18%、瓦多は4%まで低下している。逆に、女性が男性に嫁ぐ嫁取り婚は仲尼、紅頂、扎拖、亜卓が19、9、9、17%であるのに対して、下拖は49%、瓦多郷交吾村は64%に達する。

これによれば、上扎巴の走婚と婚姻形態には次のような特徴や変化がみられる。まず、上扎巴では依然として走婚の慣習が根強い。男性にとって妻子を養うという負担がほとんどないからであるという。ただし走婚にも伝来の習慣があり、それを無視することはできない。走婚は16歳前後から始まり、告白は一般に男性側からである。関係を成立させるには「搶東西」(男性が女性の飾り物を奪う)によって必ず女性の同意を得、つぎに「爬房子」(男性が女性の家の外壁をよじ登って女性の部屋に入る)を行う。男性は夜密かに女性のもとを訪れ、朝帰る。女性の家族に知られたら恥とされる。関係が安定したら両親につげる。或いは1、2年後に女性が妊娠したら2人の関係を公開する。子供の養育に関して男性に経済上の責任はなく、女性側の子供として育てられる。

しかし、1978年に道孚県で計画生育政策が施行されてからは、走婚に大きな変化がおきた。子供ができたらず婚姻届を政府に提出して、法律上の夫婦関係と親子関係を明らかにしなければならない。もし男性が結婚登記を拒否して走婚関係を解消する場合は、男性は女性に賠償金を支払ったうえに、子供が18歳になるまで養育費を払い続けなければならないとされた。そのため、人々はこれを受け入れ、子供ができたらず法律上の登記を行うようになった。ただし、大多数は法律上の夫婦になっても同居

という形はとらず、夜に妻のもとを訪れて朝帰るという従来の走婚の形態を継続しているという。とはいえ、結果的に母系制家庭に外部（外姓）の男性をいれるという形態への移行が確定した。また、心理上の変化も大きく、多くの叫依をもつことをやめ、さらには一人の妻と子供との家庭を築くために分家を選択する者もでてくる。

また、近年は走婚の婚姻圏も拡大している。従来の婚姻圏は狭く、まず村内、次に郷内であり、次のような理由があった。一は、村落は地理的に険しい高山峡谷地帯にあり、他村との距離は近くて1～2km、遠い場合は10数kmある。これは年中行事や宗教活動を共に行う範囲と一致し、同一の祭祀集団を形成し、強い精神的な繋がりを共有している。二に、同一村、同一郷では菌類や虫草などの漢方薬材を採取するという生産活動（副業）を一緒にすることが多いことから、知り合う機会が多い。三に、近距離であることは、夜通って朝帰るためには必須の条件である。そのため、距離が遠く、山越を必要とする上扎巴と下扎巴の間で走婚が行われることはほとんどなかった。四に、子供ができた時に、子供に頻繁に会って成長を見守ることができる。上扎巴では子供の90%以上が父親が誰であるかを知っている。なお、近年は道路が改善され、経済水準が向上したことで、どの家にもバイクがあり、懐中電灯もあるため、通婚範囲が拡大しているという。

また、女性が男性とともに独立して家庭をもつケースも、なお数は少ないものの増加している。この理由について、馮敏は「近年は経済状況が向上したために、家屋を購入して独立した家庭をもつことが可能な者が出現しており、その中からこれを選択する男女がいる」とする〔馮2010：135-138〕。

さらに、母系制家庭において外姓の男性あるいは女性を迎えるという「対偶婚」も増えている。これは、子供が男性のみ、あるいは女性のみの場合、男女の分業体制を維持するために、一世代は夫婦一組を原則として、伝統的に行われてきた婚姻である。馮〔2010：137〕の婚姻状況表によれば、既婚者のうち対偶婚は上扎巴の仲尼16%、紅頂23%、扎拖27%、亜卓32%で、下扎巴の下拖は34%で、かなりの割合を占めている。母系制家庭は、女性だけで維持される家庭ではなく、袁〔2011a〕が指摘するよう

に家内は女性が管理し、家外は男性が分担する。一世代には必ず男女が必要であり、近年の経済発展のもとでは現金収入をもたらす男性の役割はますます重要となっている。

小結

今回の調査で明らかになったことは、以下のようである。

一．ジャバ・チベット族の母系制社会では、走婚によって母方側が子孫を増やし、結婚および同居という形はとらず、子供は母方に属して育てられている。しかし、一家の能力のある男性が戸主となって母系の房名を継ぎ、明確な男女分業意識のもとで男性が対外的仕事、女性が内的仕事を担当して家庭経済を維持し、男女が同等に財産を共有する。彼らの社会では、女性の社会的経済的地位は男性と同等であるが、政治的役割を担うものではない。

二．母系家族を維持する上扎巴に対して、下扎巴では長男に房名を継承させる直系家族の形態が多い。これは、馮 [2010] がいうように、父系制への移行を思わせるが、男性の婚出も女性のそれと同様に行われ、兄弟姉妹が婚出する際には財産の均等相続に相当する金品が分与されており、母系制の対偶婚の展開型とみなすべきなのではないだろうか。

三．婚姻家族の変化は、上扎巴では1980年代以降の計画生育政策の浸透によってもたらされ、走婚制は徐々に解体しつつある。また、子供の数が強制的に制限されたことは家族数の減少と家族形態の変化をうみ、さらに親子関係や男女関係の意識にも変化を及ぼしている。一方、下扎巴では、走婚から登記を経た結婚への移行はすでにほぼ確立しており、それは文化大革命頃からではないかと推測される。

参考文献

馮敏 (2005) 「川西扎巴藏人親属制度初探」『康定民族師範高等専科学校学报』第14巻第6期1-7頁

馮敏 (2010) 『扎巴藏族—21世紀人類学母系制社会田野調査』民族出版社

馮敏 (2010) 「扎壩地区水庫移民問題研究」『四川民族学院学报』第19巻第2期

- 42-47頁
- 李佐人（2011）「扎巴研究的開拓与突破—評馮敏『扎巴藏族—21世紀人類学母系制社会田野調查』」四川民族学院学報第20卷第2期105-108頁
- 林俊華（2006）「扎壩「走婚部落」的歷史文化」『康定民族師範高等専科学校学報』第15卷第4期6-9頁
- 劉波（2005）「扎壩大峡谷「走婚」民俗的人類学思考」『西藏民族学院学報』第26卷6期43-47頁
- 牛島巖（1987）『文化人類学事典』弘文堂702-703頁
- 任新建（2003）『金域黄金』巴蜀書社
- 尚雲川（2006）「扎巴藏人的親族称谓」『中華文化論壇』2006-4
- 四川省道孚県志編纂委員会編輯（1998）『道孚県志』
- 松岡正子（2017）『青藏高原東部のチャン族とチベット族—2008 汶川地震後の再建と開発』（論文篇・写真篇）あるむ
- 熊靈娜（2017）「扎壩走婚形式的變化及其原因分析」『成都工業学院学報』第20卷第1期
- 徐銘（2012）「扎巴藏族母系制走婚習俗研究—『扎巴藏族—21世紀人類学母系制社会田野調查』関与婚姻の解説」『民族学刊』2012-3 24-28頁
- 羊磊（1936）「道孚小志」『川辺季刊』1936年第2卷1期
- 葉静珠穆（2009）「雅砻江流域鮮水河谷扎巴藏人研究評述」『西南民族大学学報（人文社科版）』2009-6（総第214期）47-52頁
- 袁旭川（2011a）「扎巴藏族走婚制度、家戸分工及社会性別」『広西民族大学学報』2011-4 93-97頁
- 袁旭川（2011b）「鮮水河谷扎巴藏族走婚制度研究」『西南民族大学学報』第37卷第4期196-200頁
- 趙留芳（1938）「查壩調查記」『康導月刊』創刊号127-137頁
- 趙心愚（2018）「中国西南扎巴人、摩梭人「走婚」的範圍与界限—兼論其对母系家庭形態存続的影響」『民族学刊』2018-1 19-24頁